

## 島根県支部

### 特異な世界遺産・石見銀山についての調査研究

石見銀山遺跡は、世界遺産として登録されれば、わが国で14番目の世界遺産登録となる。登録を2007年7月に控えるなか、石見銀山遺跡の現状と問題点を整理した上で、今後の方向性に関する提言を行った。

石見銀山遺跡は分かりづらい世界遺産といわれる。特に、日本人の多くは世界遺産＝観光地としてのイメージが強く、従来のようなモニュメント性を求める観点からは魅力に乏しい世界遺産となりかねない。広大な遺跡の大半が竹林、草木に覆われている中で眠っている石見銀山遺跡の魅力を多くの人々に伝えることは容易ではない。

現状の石見銀山遺跡は、銀鉱山としての役割を終えたときのそのままの姿が残されている。そのタイムスリップした、日本の原風景ともいえる自然環境とアジアでの初の産業遺跡がうまく調和している様子はかけがえのない貴重な人類の財産といえる。世界遺産指定をきっかけに、島根県民そして日本国民が石見銀山遺跡の理解を深め、よりすばらしい産業遺跡として広く世界に発信できるよう願っている。

石見銀山遺跡は、たくさんの可能性を秘めた世界遺産であるが、分かりづらさに加え、以下に代表される問題点もまた抱えている。

1. 石見銀山遺跡は、現地に至るまでの交通アクセスが十分に整備されていない。また、エリアも広大で、遺跡群が点在しているため効率的に回遊する手段に限られる。バス、マイカーでの訪問が一般的であるが、メインとなる大森地区に十分な駐車スペースがなく、温泉津沖泊地区、仁摩鞆ヶ浦地区も同様である。
2. 分かりにくい遺跡にもかかわらず案内やアピールするシステムが確立されていない。ガイドは、ボランティアに頼っている。ガイドンス施設としての箱もの設備は、財政負担が大きい。
3. いままで多数の観光客を受け入れた経験がなく、地域住民と共生できるかどうか、防犯上の問題点も大きい。また、点在する廃屋対策も課題である。

以上の問題点を克服しつつ、石見銀山遺跡を整備していくことが望まれる。そのため本報告書では、次の提言を行った。

1. モニュメント性が乏しい中で、自然との調和がすばらしい遺跡をアピールするために石見銀山スタイルの確立を図る。見て触れて感じ取ってもらうために回遊ルートや施設を整備すべきである。
2. わが国としては初の産業遺跡となる石見銀山を一過性の観光地としてではなく持続的な遺跡として保存・活用していく。そのため「産・学・官」の連携のもとで、「石見銀山協働会議」のさらなる発展を期待する。